

期末試験の最後の科目は、数学だった。

望は数学が嫌いだ。なぜかというところ、数学ができて、かわいくない。

体育と音楽ができれば文句なしにかわいい。美術や歴史、古文や家庭科もプラスになる。現国、物理、化学はどうでもいい。数学と英語はだめだ。この二つは、ちよつと成績が悪いほうがかわいい。なのに、主要科目なので授業も多いし、成績が悪いとなにかと言われる。成績が悪いのはともかく、なにかと言われるのはかわいくない。望にとつてはまさにジレンマだ。

かわいい それが望のルールである。

かわいいことだと思えば、望はどんなことでもする。長く伸ばした髪をポニーテールにしているのも、これが一番かわいいからだ。学校の制服を特に工夫せずに着ているのも、これが一番かわいいから。私服はもちろん、かわいいかどうかで徹底的に選び抜いている。ただ、そういうものか、こと衣装に関しては、望の思う「かわいい」は「地味」になってしまう。かわいさを押し売りしてしまうような衣装はかわいくないと思うので、結果的に地味になってしまうのだ。

数学の試験もようやく終わりに近づいて、望は鉛筆を投げた。答案用紙には空欄がたくさんあるけれど、少ない残り時間でやつても埋まりそうにない。答は出せなくても適当なことを書けば、部分点を稼げるかもしれないことは知っている。けれど、そんないじましいことをする気力は、望にはない。望の心はもう冬休みだった。

夏休みよりも春休みよりも、望は冬休みを愛している。冬休みには、クリスマスがある。お正月がある。それに、自分の誕生日がある。だからだとなく過ぎてゆくほかの休みに比べて、ずっと充実している。中学までは、冬休みは短すぎるのが不満だったけれど、望の高校は期末試験が終われば試験休みだ。冬休みは実質的には一ヶ月弱ある。夏休みよりは短くても、一ヶ月なら十分長い。

こうしているあいだにも冬休みが刻々近づいていると思うと、答案用紙の空欄も、ほかの生徒のシャーペンの立てるシャカシャカという音も、別世界の出来事のように感じる。望は楽しい冬休みの空想にひたつた。

朝と夜はコタツでごろごろして、昼は友達と冬花と遊ぶ。誕生日にはプレゼント、家族で旅行、お正月はまたコタツでごろごろ、もしかしたら今年もまた冬花の振り袖姿が見られるかもしれない。なにしろ冬花はお金持ちだから、お銀さんの着ているような、すごく高くて綺麗な

そして試験終了のチャイムが鳴り、答案を出して解放されると、望はまっさきに冬花のところへ行った。

「冬花、冬休みだよ！ ついに！」

「そうね。試験はどうだった？」

「そんなの忘れた。それより遊ぼうよ！ あ、今日は金曜だから、冬花はバイト？ でも三時までには遊べるよね？」

冬花は月水金とゲーム会社でアルバイトをしている。もちろんただのゲーム会社ではなく、冬花の所有する会社だ。

「バイトはないけど、今日は住み込みの家庭教師さんが家に来ることになってるの」

「住み込みの家庭教師？」

驚いて望は問い返した。

「家庭教師、兼、家政婦、兼、運転手」

冬花は淡々と説明した。それで望は納得がいった。

冬花は大金持ちの一人娘で、交通の便の悪いところ 山奥といつてもいいくらい にある大きなお屋敷に住んでいる。どこに行くにも歩いたら一時間はかかるようなところだし、バスは三十分一本くらいしかこないの、冬花は外出するときにはスクーターを使っている。

冬花はしばらく前まではずっと、電話一本でどこにでも車を呼びつけられる生活をしてきた。専属の運転手を雇っていたわけではなけれど、家にはいつも居候がたくさんいたので、誰かしらが来てくれたのだ。それに比べれば今はかなり不便な思いをしているだろう（あくまで、昔に比べれば。なにしろ冬花のお屋敷には今でも、通いの家政婦が二人も来ている）。

こうなったのは、今から半年ほど前に、冬花の父親が死んだのが発端だ。母親はすでになく、冬花はひとりぼっちでお屋敷に住むことになった。後見人についたのが、冬花にとっては従姉にあたる、

篠塚千鶴という人だった。この後見人の篠塚が悪辣で意地悪で、だつたら話は簡単なのだけれどそうではなく、ちゃんとした理由があつて、冬花の不便をそのまま放置していたのだ。

冬花經由で望が聞いたところでは、あのお屋敷に冬花がひとりに住んでいては危ないし、お金もかかりすぎるので、マンションに引っ越してほしい、と篠塚は言った。お屋敷に思い出のある冬花はそれを拒んで、そのまま住み続けることにした。住み続けるのに反対の篠塚は、冬花の暮らしを整えず、わざと不便なまま放っていたといふ。

それが、この数週間で事情が変わつた。冬花が変な居候を三人も拾つてしまつたのだ。この三人がいては、冬花がお屋敷を離れる見込みはない。篠塚は、冬花のために便利な暮らしを整えるべく、行動を起こさざるをえなくなつた。

住み込みの家政婦は、後見人からのお目付役という意味も兼ねて、ぜひ欲しいところだろう。冬花は高校二年生で今は十二月、大学受験に備えて家庭教師もつけたい。おまけに運転手まで、三役を一人でこなせるのなら、まさにうつつつけの人材だ。

「なるほどねー。でも家庭教師と家政婦つて、両方できる人なんているの？」

難関の大学を出た人で、家政婦の技術を身につけている人は、あまり多くなさそうだ。冬花の成績がひどければまだしも、たいていの大学なら狙えるくらいの点数は取っている。

「篠塚さんができるって言ってるんだから、できるんじゃない？」

「だよね。ボクも見てみたいな、その人」

貴島望は高校二年生、十二月十日現在で十六歳、ちょっとだけ口が大きいこと以外はどこといつて変わったところのない、普通の女の子らしい女の子（と自分では思っている）だが、自分のことをボクと呼ぶ。ポニーテールの髪型と同じく、これが一番かわいいから、というのが望の信念だ。

この信念を受け入れてくれる、とまではいかななくても、気にしないでいてくれる人間は少ない。けれど望には、誰がなんと言つてもこれが一番かわいい、という自信がある。それに望にとっては、冬花が気にしないでいてくれるなら、ほかの人間の言うことは問題で

はない。

「今日、会ってみる？」

「うん。お銀さんとかにも会いたいし」

お銀というのは、冬花の拾った居候その一だ。外見は十二、三歳の、一目見るだけでその日はずっと幸せな気持ちになれるくらい美しい女の子で、いつも宙に浮いている。本人の言うところでは、お銀は神様というものらしい。

「六時に来るって言うってたけど、望はいつペン家に帰ってからにする？」

望が教室の時計を見ると、針は十二時半を指していた。

今日は期末試験の最終日、冬休みの始まりの日だ。冬花の家に泊まりがけで遊びにゆくにはちょうどいい。

「冬花のうちに泊まっていい？」

「いいよ」

泊まりがけなら、いったん家に戻って着替えて準備をしたい。冬花の家はさすが家政婦を雇っているだけあって、お客を泊める準備がなにからなまでに整っているので、準備をしなくてもちっとも困らない。とはいえ、自分のものを使うほうが落ち着ける。

「じゃ、ボクはいつペン家に帰ってから行くね」

冬花は六時までに家に帰ってればいいんだよね。それまでどっかで遊んでく？」

「いい。帰って寝る。昨日、あんまり寝てないの」

それを聞いて、望は思い描く。

もし冬花がボクのお姉様だったら…

冬花の部屋で、昼間から部屋のカーテンを閉め切って、並んで昼寝するところを望は想像した。冬花は床につくなり、すやすやと寝息をたてはじめ。望は眠れずに、冬花の寝顔を見たり、冬花との思い出にひたったり、冬花の温もりを感じてうっとりしたりする

冬花は、望の理想のお姉様だ。まず外見が理想どおり、つまり、二重まぶたの切れ長の目に眼鏡をかけていて、長い髪を三つ編みにして、足も体も細くて、自分より五センチくらい背が高くて、胸はごくごく薄い。望のこの理想を、冬花は百パーセント満たして

いる。

中身は聖人君子ではないけれど、望もそんなお姉様は欲しくない。一見ちよつと冷淡そうな（でも本当は優しい）、物事に動じない（でも鈍感なわけではなく）、寂しがり屋の（でも騒がしいことは嫌いな）、責任感のある（でもちよつと優柔不断なところもある）、というポイントさえ押さええていれば、少しくらい嘘つきでも意地悪でもかまわない。冬花は百点満点だった。

望がこんな気持ちを抱いているとは、冬花は知らない。望は、友達として冬花と親しくできれば、それでもう十分だった。はずだった。

「…で、お昼はどうする？ 一緒に食べる？」

望は我にかえた。

「あ、うん、一緒に食べようよ」

二人が席を立ったところへ、

「あ、『ボク』、今日これからどうすんの？」

声をかけてきたのは、くるみだった。『ボク』は望のあだ名だ。

くるみは望と同じ中学、同じクラスからこの高校にきた。中学のときにはあまり親しくなかったのが、高校にきてからは同じ中学のよしみで、なにかと一緒に行動することが多い。

「冬花とご飯食べるつもり」

「そつから先は？」

「冬花は帰って寝るって。ボクは、ちよつと適当にヒマつぶしてから帰ろうかな」

「じゃ、『ボク』は今日は予定ないんだね。つきあわない？」

「何時まで？」

望が問い返すと、くるみはニヤツと笑った。造作がきつい顔なので、こういう表情をすると、悪役のような雰囲気になる。

「あんた、なんか隠してる。なんか面白いこと、あるんでしょ」

「なにそれ。なんかって何？」

「…ふーん、へー、そーか、そーなんだ。わかった。そーゆーことか」

ただのハツタリだと望は判断した。

「うん、そういうこと。お昼は一緒に食べる？」

「ちよっと『ボク』、びびんなさいよ」

「なんのことやら」

横から冬花が言う、

「教えてあげたら？」

「くるみはもうわかってるんだよね？ 教える必要ないじゃん」

『『ボク』って最近、口がうまくなくなってない？』

望はぎくりとした。本当に口がうまくなくなっているかどうかはともかく、うまくなる理由は確かにある。

「なんのことやら」

くるみは唇をへの字にして望を睨み、

「…じゃーね」

と言つて、行こうとした。

「あれ、お昼は？」

「家で食べる」

くるみが教室を出ていったのを見て、望はつぶやいた。

「…怒らせちゃったかな」

「誤解はされたかもね」

「え？ なんで？」

それには答えずに冬花は歩き出して、

「行く。ここでうだうだしててもしょうがないし」

「なんで誤解されたわけ？ どう誤解されたの？」

冬花は小さくため息をついて、

「私と望が、友達をやめて恋人になったと思われたんじゃない？」